

平成28年度
第2回岩手県震災アーカイブシステム構築に係る有識者会議 議事録

1 日時：平成28年10月12日(水) 13時30分～15時05分

2 会場：県庁11階 労働委員会委員室

3 出席者

(1) 委員(敬称略、五十音順)

草野 悟 三陸DMOセンター 総括コーディネーター

工藤 昌代 株式会社ホップス 代表取締役社長

齊藤 賢治 一般社団法人 大船渡津波伝承館 館長

柴山 明寛 東北大学 災害科学国際研究所 災害アーカイブ研究分野 准教授

◎南 正昭 岩手大学 地域防災研究センター センター長

森本 晋也 岩手大学大学院教育学研究科 准教授

◎委員長

(2) 事務局

熊谷 正則 岩手県復興局復興推進課 総括課長

小野寺 重男 岩手県復興局復興推進課 特命課長

平野 達士 岩手県復興局復興推進課 主任

村上 洋平 岩手県復興局復興推進課 主事

(3) 委託業者

細川 剛志 凸版印刷株式会社東日本事業本部 第1営業本部 部長

荒川 丈寿 凸版印刷株式会社東日本事業本部 BI本部 部長

細川 将 凸版印刷株式会社東日本事業本部 BI本部 係長

田中 淳子 凸版印刷株式会社東日本事業本部 企画制作部 課長

4 会議次第

(1) 開 会

(2) 挨拶(岩手県復興局復興推進課総括課長)

(3) 議 事

1) 岩手県震災アーカイブシステム構築に当たってのWGからの提言について

2) 岩手県震災アーカイブシステムの名称について

(4) 閉 会

資料一覧

- 資料1 岩手県震災アーカイブシステムの構築に当たってのWGからの提言
- 資料2 WG提言を踏まえたページ遷移(イメージ)
- 資料3 詳細検索画面
- 資料4 第1回有識者会議における意見への対応
- 資料5 WGにおける意見への対応
- 資料6 岩手県震災アーカイブシステムの名称について

1 開 会

【小野寺復興推進課特命課長】

- 開会案内

2 換 拶

【熊谷復興推進課総括課長】

- 委員の皆様、全員ご出席いただきありがとうございます。8月22日に第1回目の有識者会議を行い、アーカイブシステムの大枠について議論いただきました。その会議後、9月28日に沿岸市町村のメンバーの皆さんによるワーキンググループを開催し、1回目の有識者会議の議論を踏まえた検討をしました。今回はそれらを踏まえ、具体的なページ遷移のイメージなどを議論いただきたい。併せて、アーカイブシステムの名称も議論いただきたい。専門の立場から忌憚のない意見をお願いいたします。

【小野寺復興推進課特命課長】

- 委員全員の出席により会議が成立する旨の報告。出席者の紹介。

3 議 事

(1)岩手県震災アーカイブシステム構築に当たってのWGからの提言について

【南委員長】

- 事務局から説明をお願いします。

【平野復興推進課主任】

- <資料1>～<資料5>の説明。

【南委員長】

- 資料1から5に対し、ご意見ををお願いします。

【齊藤委員】

- <資料1>左下の「発災前」「発災直後」とあるが、大事なのは津波が来るまでの時間。これがストレートに命に関わる問題。多くの方々が逃げなかったということが大きな問題だったが、その辺りに触れてほしい。地震が発生して津波が来るまでの間、みなさんはどのような行動をとっていたのかということが注目すべきところではないか。岩手日報に出ていた、首都大学で発表した人の動きを描いていたものがある。これは今後生かすべきデータではないか。なぜこのような動きをしたのか、と思える行動などがある。人の命を考えればこのアーカイブで一番大事にすべきところはこういったところではないだろうか。発災後については、行政・消防・警察にたくさん動いていただいたが、その前の段階の方が、むしろ、いろんな地域の人にとっては大切ではないか、次どこかで発生したときに参考にしてほしい。このようなことは触れられているのか。

【平野復興推進課主任】

- 第1回の有識者会議でも同様のご意見をいただいたが、それを踏まえ、前回は「発災前・発生直後」とまとまっていたものを今回は「発災前」「発災直後」に分けています。

【齊藤委員】

- 地震と津波が一緒になっている。地震が発生してから、津波が来るまで時間が違う。その辺りがポイントではないか。以前、なぜ津波の話を書いたがるのか静岡の人に聞いたら「助かりたいからだ」と言われた。聞きたい人が切実に思っているということを感じた。

【平野復興推進課主任】

- 発災前の資料をしっかりと集めていきたい。市町村のハザードマップを安全マップと考えて、その想定通りには助からなかった命があるということしっかりと捉えていきたい。

【齊藤委員】

- ハザードマップを100%信用している人がたくさんいて、これを基準にして「我が家は被災しない」と思っている。しかし、これはあくまでも目安であるという行政の話がある。ただの目安を信用してはいけないと話しているが、信用されていることに恐ろしさすら感じることもある。陸前高田の体育館はハザードマップでは30～40cmだったが、15mにもなった。

【南委員長】

- ハザードマップは必要とされている。前提条件として齊藤委員がおっしゃることも含めてハザードマップがないといけない。いまの復興まちづくりも同様だが、3.11の経験に基づいてつくられているから、そのことを伝えていかないと「これで安全な街ができた」と考えられても困る。伝えるときにはご指摘の通り、気を付けなければならない。このアーカイブのあるデータだけを見て、信じてもらっては困ることもでてくる。そういった前提条件もわかりやすく伝える注意は、全体を通して入れる必要があると思う。

【齊藤委員】

- ハザードマップは明治29年以降の津波が基準になっていると思うが、津波はそれよりも前から追っていかないといけないのでは、と今回の津波で思った。ただの目安を信じてもらっては困るから、むしろないほうがいいのではないかと考えている。道路標識も過去の津波はここまでという書き方をしている。

【工藤委員】

- 「発災直後」は地震が基準か、津波が基準か。

【平野復興推進課主任】

- 3月11日14時46分の「地震発生」を基準に考えている。

【草野委員】

- 齊藤委員がおっしゃったように、これを誰が使うのかということを考えるとある程度専門性を持った人などだと思う。その場合、東日本大震災だと津波到来まで20～30分のタイムラグがあるが、即津波というケースもあり、30分あるから大丈夫だと思われるも困る。いろんなケースがあるので、これを使って各住民にどれだけ教えられるのかという最高の教科書になるという前提でこれを作らなければならない。

【柴山委員】

- 齊藤委員の話でもあったが、展示施設の展示内容を考える際でも津波が到来するまでの間、津波が到来してから1日ぐらい、津波がひくまで、と表現することが多く、そこはかなり注目する方々も多い。津波到来はアーカイブでも強調されるべきところでもある。南海トラフ地震の場合は東日本大震災とは異なり、猶予時間が無く津波がいきなり来るといふこともあるので、表現は注意しなければならないが、興味を持っていただける方が多いということで、入れ込むことが重要だと思う。

【工藤委員】

- 詳細検索の時間軸を選ぶにも影響してくるのではないだろうか。

【平野復興推進課主任】

- 詳細検索については、訴求ポイントとは関わりなく、抽象的になんとなくここを見たいと思った人が時間軸から選んでいただけるような時間軸を設定しなくてはいけないと考えているため、必ずしも訴求ポイントと時間軸はリンクしなくてよいと考えている。

【草野委員】

- 「発災直後」の項目の中に、津波の到達が市町村毎にバラバラとあり、客観的なデータも入ってくるということだろうか。それを追いかけていくと、陸前高田の津波到達は何分、こちらの町は何分、地形によってはこちらが何分だったというようなことが見られるようになるということか。

【平野復興推進課主任】

- どういった資料がでてくるかにもよるが、そうだと思う。発災直後といっても数時間というレベルではない。発災したのが午後3時ごろですぐに暗くなっており、写真も撮れないような状態だったので、1日・2日ぐらいの猶予をみて期間を設定したいと考えている。

【草野委員】

- そうはいつでも、映像が残っている。各自治体も議会の終了日で、報道関係者が市役所にたくさんいたので、記録がたくさん残っているという特別なケースだった。

【南委員長】

- そのほかの観点からよろしいでしょうか。

【工藤委員】

- 訴求ポイントの「障がい者等への対応」について、障がい者だけではなく、性別、疾患の部分も含めた対応ということだと思うが、そうすると、「要配慮者」という表記もいいのではないかと思う。

【平野復興推進課主任】

- 要配慮者という用語は災害対策基本法に載っている用語なので、その用語を使用することは適切であると思う。しかし一方で、要配慮者という用語が一般県民にどれぐらい伝わっているのかというところがあったので、障がい者等という文言にさせていただいたが、ここについてはご意見をいただけたらと思っています。

【柴山委員】

- 要配慮者という用語は、最近ニュースメディアでも良く使われている言葉にもなっているし、障がい者等への対応とすると、そこに高齢者や女性、乳幼児などがイメージできるかということが、工藤さんがおっしゃっているところなのかと思う。要配慮者という言葉を使わなくても、クリックを促し、そこにその資料があるということがしっかりわからなければならない。これでは障がい者に特化した内容がでてくるようなイメージがあると私も懸念している。

【熊谷復興推進課総括課長】

- 復興局で検討した際にも、障がい者等の「等」が高齢者や女性、病人、外国人を指しているのもこれでいいのかという議論もあった。しかし要配慮者という文言だと、ちょっと役所っぽいということもあり、とりあえず、障がい者等の対応とさせていただいた。これに代わるいい表現があれば、ぜひご意見いただきたい。

【草野委員】

- アメリカではすべてハンディキャッパーでひとくくりになっている。日本人で英語が喋れないとアメリカではハンディキャッパーと呼ばれる。今回はハンディキャッパーという表現はないだろうと思うが、障がい者等の対応で意識するのは身体障がい者などイメージに直結してしまう。

【工藤委員】

- 要配慮者というと、幅広く支援しなければならないかなというイメージはつくと思うが。

【南委員長】

- 前回の「個性」では、ちょっと分かりにくい。ハンディキャッパーはFor allという考え方。皆さんを抱えるというように持っていくとそういう考え方になるが、日本語では、すべての皆さんへとは言わない。

【草野委員】

- 「弱者」という捉え方は、自分が弱者だと思ったらそこにいってしまうから、なかなか難しい。

【柴山委員】

- 災害弱者が災害時要援護者に言葉が変わり、いまは災害時要配慮者という言葉に変わり幅広くとらえられるようになってきている。要配慮者が今後変わるか、変わらないかということもあるが、この中で障がい者等の言葉では想像が難しい。すぐに思いつくものではないが、やはりこの中ではクリックしづらい。

【森本委員】

- 例えば支援が必要な人、配慮が必要な人というように固有名詞ではなくて、内容を表すようにしてもらえば、子どもでも分かる。教育の立場から意見させていただくと、小学校5、6年生、中学生が分かるようにしていただければ、おそらく市民も分かるちょうどよさであると思う。あるいは、研究者だけを対象にするのであれば難しい用語でもいいと思う。見る方のターゲットに合わせた言葉がいいと思う。
- 教育の観点から、学校教育で利活用することをイメージしながら見させていただいたが、学校の先生のような大人の方々が教材研究として見るのであれば、こういったもので見られる。しかし、小学生・中学生、高校生でも情報の渦に巻き込まれず、なおかつ、ここから自分で調べて学ぶということを考えると、子どもの目線

にたった配慮があるといいと思う。ワーキンググループの提言を見ていると、岩手では岩手県の復興教育というものが全県下で進められているが、例えばそこに関係するところだけなど、ある程度絞り込まれている中で、特に教訓として知ってほしいところ、後世に伝えたいところ、学んでほしいところをセレクトして子どもたちなりに調べられるというような情報の階層があってもいいのかなと思う。すべての記録から掘り出せる部分と、子どもの学習の範囲で選んでいいものというものがあると良い。現状だと今後の利活用の推進を考えた際に小学生・中学生は情報を探すのは厳しいと感じる。キーワードを入れて出てくれば良いと思うが、それでもかなりの量が出てくる場合は絞り込まれたものがあるとか、あるいは、副読本やプログラムの番号に主に関連するものがあり、データそれぞれに復興教育何番という主だった資料が検索できるということも、可能な範囲で実現できるといい。岩手らしい教育に力をいれていただければお願いしたい。

【平野復興推進課主任】

- 現時点で具体的な返答は難しいが、＜資料3＞の詳細検索が設定されている。この中にカテゴリーを選ぶという項目があり、この中から子ども向けのカテゴリーを抽出して、それを子ども用のコーナーとして設けるようなことは技術的には可能なのではないかと思います。どれが子ども向けのカテゴリーとなるかは判断が難しい部分がある。

【草野委員】

- どこまでの子ども向けにするのかということも考えなくてはいけない。子ども向けを小学校高学年から中学生をターゲットとするならそこに合わせ、高校生以上は大人とすればよいのではないかと。

【柴山委員】

- 別の観点からお話すると、私は地域防災や地震工学が専門だが、実は訴求ポイントから見わけではなく、最初から詳細検索からいってしまう。専門家だと詳細検索から自分の目的のものを見つけられるとある程度分かっているということが前提なので。ここはもうちょっと小学生、中学生、高校生、それから災害をあまり知らない一般の方に伝えていくという分かりやすさがあつた方がいいと思う。

【南委員長】

- 今まであまり議論されてこなかったが、全体の論調、いろいろなところに出てくる言葉などを考えたい。新聞は中学校を卒業すれば読めるぐらいのレベルで書くなど、一般の人を対象にしたときにどのぐらいの言葉遣いをするか。全体としては新聞レベルの言葉遣い。場所に応じて専門用語が入ってくることもあると思うが、案内文や説明文を加えるようなときには一般に伝える言葉のレベルが良いと思う。
- 前回の委員会でも意見があつたが、さらに子どもに利用してもらうということはとても大きいポイント。このアーカイブシステムのきわめて際立った特徴になると思う。復興教育を県でやっているの、それを学んで家に帰って、パソコンで利用してもらえとなれば、利用率は毎年上がっていくと思われるし、作る一つの意味もそこにおけるのではないかと。森本先生もおっしゃっているが、教育委員会で使っているページ、カテゴリーがあれば、それをご提示いただければと思う。システムを作る際にあまりハードルを高くして、年度内が無理となってしまうてはいけないとも思うが。

【森本委員】

- 岩手県内の子どもはもちろん、全国の学校でも防災教育は関心が高いので、岩手の教訓を学ぼうというアーカイブになっていくのかなと思う。

【工藤委員】

- 複数カテゴリーで検索ができるのか。

【平野復興推進課主任】

- 複数検索できます。

【南委員長】

- 個人の方が復興のために努力していた点、防災に使われる言葉の自助、共助、公助の中で自助の部分があまりイメージしにくい。例えば、災害FMを頑張って立ち上げて続けていた人、漁業被害にあった加工場を建て直した人、そして商店者の集まりを作って補助金を申請する試みをしてプレハブを建てて商売した人など、共助と重なる部分もあるかもしれないが、個人の部分もあった方が見る人たちに「こんな努力した人たちがいたんだ」と伝わる。そうじゃないとすべて行政の対応のおかげでいろんな産業も助かったような見方になってしまう。実際そういった部分もあったが、自助、共助、公助の3つの柱があった方がさらに見る方が多くなるのではないか。NHKなどで取り上げられているような方になるのかもしれないが、訴求ポイントに入れられないだろうか。

【草野委員】

- それはとても難しいのでは。地元にいるのでよく分かるが、グループ補助の申請がうまいNPOなどが得をしですぐにニュースにでるとか、岩手県は零細・小規模の水産加工業者が 90%いた。その人たちは補助金をもらっていない。ニュースにでるのは、わずか5%の人たち。それをヒーローにしてしまっただけはおかしい部分も出てくる。それはあくまでもニュースとして見て個人が判断するというレベルにしておかないと、誰が成功事例だとしてしまうのは非常に難しい。

【南委員長】

- 難しいとは思いますが、欲しいところがあると思う。

【柴山委員】

- 「人の力」というところを見せたいということだと思うが、人が介在しているという表現があってもいいと思う。

【草野委員】

- 一般企業がグループ補助で成功していたことを示すには、精査が必要だけれど、例えば広田湾の先の集落が孤立してしまった時は、リーダーが良くて、みんなの米などを集めて、分配して生き延びたという事例などはいいと思うが。

【南委員長】

- 我々は、東北サマースクールというものをやっていて、毎年3～4人の個人またはグループを対象に、主体的に頑張っている人を審査して表彰している。審査のプロセスで判断のつかないものは除外される。そういう意味では選抜に時間を要する。怪しいものが入ってしまったら信頼性を失うことが多分にある。

【草野委員】

- 被災した方々の中には、根底にひがみ・やっかみが充満している。そういう精神的なものを浮かび上がらせてしまうとアーカイブではなくなってしまう。むしろ、使うのは専門家というよりも、学校教育に使ってもらって子どもたちに学んでもらった方が次の防災に間違いなく役立つので、視点をそちらに置くということは大賛成。言葉も全部わかりやすい言葉にはなっているのでこのあたりはよく整理されているな、障がい者等についても配慮を要するという表現などは素晴らしいと思って聞いていた。

【柴山委員】

- 訴求ポイントの6つの前に、防災、教育、交流人口という3つの柱がある。現状、訴求ポイントのくくり方が防災と教育がまとまってしまっているから分からなくなっている部分もあると思う。その中で教育が一番重要ということはある。利用率を考えると、小・中学生は人数が多いので、かなりの利用率があると思う。通常のアーカイブだと、専門家や行政・企業の防災担当など、あまり数が多くない人に利用されている。子どもたちに見ていただくことは、岩手県の地域の防災力向上において重要である。内容もそこに合わせた形が欲しい。

【工藤委員】

- 先ほどの孤立した集落で米をまとめて生き延びたということなど、災害があったときにどうやって生き延びたのかという事実を入れて、個人を明確化するのではなく、行政としてでもなく、あげていくというのはどうか。

【草野委員】

- 子どもたちに一番響くのはそこ。支え合うとか。

【工藤委員】

- 大槌で人を避難させるために、高いところに登らせるのにどうやったのか、避難できない人を含めて。

【草野委員】

- 良い例をあげるとそういうものがいっぱい出てくるが、アーカイブとしてすべて事実として出すとなると大川小のような例も岩手県にもおそらくある。それをどこまで出すのか。良い例はたしかに支え、生きる希望、勉強にもなるが、海の方へ行って流された人も事実として入る。それを探すと一番もっているのはメディア。正しい取材をしていると思う。それを拾いだして、セグメントしていくという方法もある。

【工藤委員】

- あくまでも事実。個人を特定しないが、こういうやり方でうまくいきました、逆に失敗しましたという事実は誰かの役に立つ。

【齊藤委員】

- そういう話は現地に行けば良かった点、悪かった点など地域ごとにかなりある。現地に行かないとわからないので、ちょこちょこ行くといろいろな話を聞ける。いずれそういった調査もされるかもしれないが。

【柴山委員】

- この中でも交流人口の拡大というものが目的にあるので、最初の内容を厚くして、そこから交流していただく、行ってみたいなどという気持ちになれるような形を、ふるさと岩手のところに拡充していかなければならないかなと思っている。

【齊藤委員】

- 現地では自助、共助という話もかなりある。
- 「備え」で具体的な内容はあるのか。

【平野復興推進課主任】

- ハザードマップなどです。

【齊藤委員】

- 一般の人が苦勞したのは、ライフラインが断ち切られたこと。行政からの温かい手が伸びるところもたくさんあったろうし、家は流されず助かったお宅にはほとんど手は差し伸べられていないというのがあった。その中で、電気がなければ一切の生活ができませんという家がたくさんあったが、それに対応しなくてはいけない。我が家はアウトドア好きでエンジン発電機があったから、ほかの家とは若干違う生活ができたが、備えといえはそういったものがあると思う。東京防災を取り寄せて見たが、トイレはバケツ一杯の水で流してください、紙は流さないでくださいと書いてあるが、その水をどこから持ってくるのかということが書いていない。備えとして書いてあるのはペットボトルに何本ぐらい必要だとか、ちぐはぐなこともあった。岩手県ではもっと実のある内容にしてほしい。

【森本委員】

- 「いわての復興教育」の3つの教育的価値の一つ「そなえる」の中に、自然災害のライフラインへの影響というものがある。まさに震災の教訓で、あの大変な状況の中、岩手の人たちがどう命を守ってやり過ごしてきたのか、だからどういう備えをしなければいけないのかという学習項目がある。このアーカイブを使ってキーワードで入れた時に、例えば自分たちの力で何とか必要なものを集めてというエピソードや写真一枚があるだけでも大きな学習教材になる。その前にどんな被害を受けて大変な状況なのか、人々はどのように生き延びて復興していったのかという、ポイントとなる資料があるとよいのではないか。おそらく地元の新聞社でも発災直後からさまざまな写真をだしていると思うが、その中から少し有益な写真や記事を提供していただくなどどうか。学校教育では新聞を活用した教育も行っているので、復興教育、防災教育、新聞教育など合わせて教育ができるようになる。岩手も持っているいろいろな情報を活用できると良い。

【草野委員】

- 写真はブロックしているのか。使いまわし、抽出できるのか。

【平野復興推進課主任】

- 抽出できるような資料を提供することを基本とします。

【草野委員】

- メディアの中ではダメというカメラマンもいる。映像関係は権利の関係でほとんどダメだと思うが、全部引っ張ってきて使えるなら私はすごく助かる。岩手日報やNHKなど、それぞれオープンにしてもいいという資料はたくさんある。一度メディア会を開いて提供してくれないかをお願いするのもいいのではないかな。可能性はかなり高い。メディアでもそれぞれアーカイブを作っているので検索するとバッティングする。

【森本委員】

- 前回のガイドラインの時にもメンバーに新聞社の方がいたので、使っていいという資料を提供していただければというお話もした。それは先生方や教育委員会は知らないが、岩手日報も復興教育で使う場合には提供するとおっしゃっている場合もある。ただし、それが今回のアーカイブとどこまでリンクできるかという確認は必要だと思う。

【草野委員】

- 新聞社が一番気にするのは、被写体が住民の場合は使用NG。住民が写っていないものだと無機質でリアリティに欠ける。

【森本委員】

- 写っている方の許可も必要。

【柴山委員】

- ガイドラインの作成でも話がでていたが、肖像権の問題がある。新聞やメディアでは、その媒体に載せるからOKだという約束でしか撮っていない。ほかの第三者が使うことを想定して作っていないので、肖像権の問題は多く存在する。写真以外にも新聞記事の内容というものは教育に役立つものが多いと思うので、なるべく岩手日報や東海新報など活用させていただければ、厚みが増していくと思う。

【工藤委員】

- 載せるときには顔をぼかすとか、NGなところはそれでクリアにする、またはその交渉をするなど。

【草野委員】

- 作業的に大変。予算があればできるが。

【工藤委員】

- 最近のソフトを使うと顔認識で一気にできるかもしれない。

【草野委員】

- 各メディアとリンクしてしまえば良いのでは。

【工藤委員】

- 写真ありきなのか。

【柴山委員】

- 写真も重要。新聞記事も時系列に並んでいるということが一番重要で、その出来事がすべて分かるという点がある。ほかの資料だと時系列では間が空いてしまうが、新聞記事は間を埋めてくれる内容が多い。写真は著作権等あると思うが、記事を入れていくことは重要だと思う。

【平野復興推進課主任】

- 訴求ポイントの前例なき行政対応の候補のときに地域の新聞社にお願いをすることは想定していたので、今のご意見を踏まえて、新聞記事等広めに考えて交渉してみたいと思う。

【南委員長】

- この主体的な試みというものも、新聞社が見て書いたということで、そこから拾っていってもらうのがいいと思う。

【柴山委員】

- 有料記事で商売をしているのでどこまで出してもらえるかということはあると思うが、学校教育だけに限定することができれば、小・中学校はアクセスできるメリットがかなりあると思う。
- 大項目、中項目について。岩手県には検証報告書というものが作られていて、22項目の検証報告がされている。その中で抜けているものがある。通信、非常用電源、燃料確保、人的・物的被害の集約、今回の岩泉の例もあるが孤立地域の対策、以上が項目から抜け落ちてしまっているのが問題だと感じる。ぜひ事務局側に検討していただきたい。検証報告書というのはマイナス部分になるかと思うが、抜いてはいけないと思うのでそこもぜひ反映していただき、大項目、中項目に盛り込んでいただくと東日本大震災でこういった問題が大きく出ていたんだということが子どもたちにも伝わり、どういう対策をしてきたのかという復興についても分かって子どもにも大人にもより良いのではないかな。

【齊藤委員】

- 震災後に苦労したことは、通信が途絶えたこと。家族の安否もわからず、直接足を運んでみてみないと分からないということが大変だった。あれで犠牲になった人もいたと思う。その後、水、食料、トイレなどが苦労した。ライフラインが断ち切られ、生きるのに大変だった。

【工藤委員】

- 震災の後、電波塔が全部上に上がって断線にならないようにNTTなどが実施したと聞いている。

【柴山委員】

- 岩泉の件では通信ができずに、行方が分からずということもあった。岩手県の中ではまだすべての対策としてはできていない。

【草野委員】

- 直近では岩泉の孤立は大変な問題。

【工藤委員】

- そもそも通信がない、電話線はあるが携帯はつながらないなど、震災がなくてもつながらないところはある。

【草野委員】

- 岩泉のおばあちゃんたちは携帯じゃなく、固定電話だ。あと無線。だから自分の足で道路を下って状況を確認しに行った。今回は災害というくくりで、全部考えると集約できなくなってしまう。

【南委員長】

- 項目立ては今日までに決めるのでしょうか。大項目、中項目などについて、いま足りないことなど指摘があったようだが。

【平野復興推進課主任】

- 今日の議論を踏まえて決定したいのですが。

【南委員長】

- もう少し意見があった場合など、追加できるのはいつまでになるのか。

【平野復興推進課主任】

- 10月末が目安です。

【草野委員】

- スタートしてから不具合があれば追加修正していけばよいのではないかと。

【平野復興推進課主任】

- 修正が入った場合に、また資料データを一から見直さなければならなくなる。

【南委員長】

- それでは10月末ということで。項目は増やし過ぎてもダメ。全部を網羅することはできないが、ある程度のところでは抜けがないかどうかだけは、しっかりとチェックしていかなければならない。

【平野復興推進課主任】

- 大項目、中項目はポイント部分のみを入れている。すべてを網羅するのは詳細検索になっている。抜けの有無については、＜資料3＞詳細検索でお願いしたい。

【南委員長】

- いま、すべてやることは時間的に難しい。いまだ意見をもとにいくらかの補うべきものが残っているかもしれないという懸念がある。ぜひ、皆さんからも意見をいただいたり、各部署で確認いただいたりして、これは

肝心で抜けてはいけないものだというものがないか見てほしい。新聞社にもどの程度可能か確認していただきたい。

【柴山委員】

- 一番心配なのは、副読本からの抜け落ち。副読本をもう一度おさらいして、この項目をしっかりと見直さなければならぬ。学校の先生たちが困ってしまうことがないように。

【森本委員】

- ライフライン、災害時の情報収集や伝達をどうするかなどの学習項目が入ってる。いままさにでた話の中ではどこになるのかという点を確認していた。情報がない中でどうやって安否確認をしたり、連絡をとったり、被災地で生き抜いてきた人々の行動が読み取れる資料が所々でもいいので入っていることが非常に大切。副読本には、「いきる」、「かかわる」「そなえる」の3つの教育的価値と、具体の21項目に関する資料が入っているが、このアーカイブとおそらくかなりの部分で重なっている。この21項目について抜けがないかということを確認することと、自助的な行動や、例えば漁業が絶望的なところからどうやって再開したのかということなどが沢山でなくても、1つ、2つでも資料があるといい。宮古のスーパーで高校生が大人に向かって「一人1個までにしてください」と呼びかけボランティアをしたとか、大船渡の中学生が「私たちにできることがあれば声をかけてください」と新聞を作って地域に配るとか、当時の大事な資料があるといい。

【南委員長】

- それはどこから探したらいいでしょうか。

【森本委員】

- 新聞や県がだしているものの中にちょこちょこ入っている。県のプログラムや副読本に掲載されているものもある。田老第一中学校のボイジャーという震災記録の部屋では、発災時に学校の先生がどのような対応をしたのかのメモが残っていたり、中学生が自宅に戻った後に学校へ来てできることはないかと呼びかける写真が残っていたりする。次の人づくりの良い教材になると思う。まもなく震災後に生まれた子どもたちが学校に入ってくるので、それを前提にアーカイブを作りたいと思う。

【柴山委員】

- 公的機関で作っている記録誌があり、その中に証言集はある程度載っているのだから、そこから一つずつ抽出して入れていく。記録誌を単体で載せるのではなく、抽出して入れると、学校の先生など楽になる可能性がある。いろいろ権利の問題はあると思うが。

【草野委員】

- 岩手日報から記録誌は2・3冊でている。県から交渉してマッチングしていけば可能性はあるかもしれない。

【森本委員】

- 例えば、復興教育プログラムの中に写真がたくさん入っているのは、教育委員会が学校等に許可をとって入れているもの。これがアーカイブに入ってくるのは、おそらく大丈夫ではないかと思う。この写真にちょっとコメントがあるだけでも教材になる。

【南委員長】

- ちょっと大変なことではあるが、アーカイブの一部分の強い目玉になると思う。学校で教育を受けた子どもたちが、教科書を見ながらこのアーカイブにアクセスするということが定常化していくと、素晴らしいことだと思う。それ以外の利用者はもちろんいるが、一つの入り口として考えていただくということは、委員の皆さまの考えだと思う。もちろん南海トラフを気にしている人たちが、備えとして岩手はどうしたんだということを知りたいということもあるでしょうが、未来へつなげる伝承の機能が特徴としてあるといい。

【平野復興推進課主任】

- 前例なき行政対応のところだが、新聞社や地元FMなどの活動が漏れているので、「行政」を削除して「前例なき対応」としたい。

【南委員長】

- 10月いっぱい決めてスタートさせなくてはいけないので、項目立てについてはそれまでに確定していくことである。もっと早い段階で皆さんからご意見があれば頂戴したい。庁内でさらに抜けがないかを確認していただきたい。

(2)岩手県震災アーカイブシステムの名称について

【南委員長】

- 岩手県震災アーカイブの名称について説明をお願いします。

【平野復興推進課主任】

- <資料6>の説明。

【南委員長】

- 皆さんからご意見いただき、ここで決めることは無理にはせず絞り込みたい。

【草野委員】

- 名称案は岩手震災津波アーカイブというものを使いたいのか。台風による山津波もあるからどうだろうか。

【南委員長】

- 名称案の絞り込みからいかがでしょうか。

【工藤委員】

- 「いわて震災津波アーカイブ」が柔らかくてよいのではないかと思う。

【南委員長】

- 皆さん同じご意見でしょうか。同意見のようですので、名称案は「いわて震災津波アーカイブ」で。
- 続いて通称をつけるかつけないか。資料の中で良いものが付けるということになると思うが、いかがでしょうか。

【柴山委員】

- つけないとなると、久慈や大槌のアーカイブもあり、津波伝承館もあるので、なるべくそこと分けるためにつけた方がいいのではないかなと思う。個人的に愛称は欲しいと思う。

【工藤委員】

- 前回私が通称はなくていいのではと言った本人だが、つける方向でもいいと思う。しかし、つけても検索などで岩手県のアーカイブに行こうとする場合に通称を知らないとそれでは調べないし、例えば「鬼手形」とつけても、「鬼手形」=アーカイブとはたぶんならないかなと思う。

【柴山委員】

- アーカイブ専門でやってきて思うのは、東日本大震災アーカイブという言葉のものが乱立し過ぎていて、どれがどれだかわからなくなってしまっている。通称があると専門家にとってはわかりやすい。海外表記をするときに、同じように見られてしまうのを避けたいという意図があり、あった方がいいのではと提案した。

【草野委員】

- 検索するときは通称ではなく、岩手 震災 津波 アーカイブと入れると思う。その時に、通称が出てきてもいいのではないかな。

【南委員長】

- 色のついていない言葉でインパクトがあり、共有できるような通称があればいい。人によってカラーが限定されてしまうようなものをつけるのはどうだろうかと思う。しかし、そんな言葉があるのかという問題もあるが。

【森本委員】

- つけるならば、アーカイブを作ったメッセージ性が分かりやすくでていると教育的効果のようなものがある。タイトル一つとってもそこにメッセージ性があり、優しい言葉、誰もが分かる言葉だといいなと思う。何度も見ているうちに言葉は入ってくるものなので。

【草野委員】

- 森本委員の趣旨で事務局に一任していいのではないかな。ここで議論しても、多数決の票を集めるようなことになるだけ。

【南委員長】

- なぜ作ったのか、我々の想いを伝える言葉がいい。

【草野委員】

- 宇宙ロケットにはすべて名前を付けていますよね。

【工藤委員】

- ほかの県内のアーカイブはどんな名前をつけているのか。

【柴山委員】

- 久慈市ではストレートに地域の名前です。

【草野委員】

- 市町村の場合、それ自体が固有名詞で人格を持っているから、つける必要がない。

【工藤委員】

- それであれば、「いわて」と入っていることでいいのかなと思う。ただし、想いの部分では悪くはないと思う。

【南委員長】

- ない、ということもありだと思う。「いわて」という言葉で想いを入れてしまう、あるいは、メッセージとして分かりやすい一般的な一言つけるという、どちらの方向もある。いまの出た意見をもとに事務局に最終的に決めていただきたい。

【工藤委員】

- なくていいといった立場だが、中であえていいなと思うのは「ブドリの祈り」みたいな意味合い、言葉のきれいさはいいかと思う。ほかの地域にはない、岩手ならではの言葉だという気がする。

【南委員長】

- 津波ではないという意見もある。

【草野委員】

- 男は口に出したくない。鎮魂、祈りとか言葉にしないのがかっこいい。ストレートに祈りとしてしまうと、アレかなと思う。

【工藤委員】

- 基本的にはなくてもいいのではないかと思います。灯台とかハマナスとか地域に由来するものは、船の名前になっていることもある。なのでそうではない方向がいいと思う。

【草野委員】

- ブドリだけでも、グスコーだけでも、いいと思う。北リアスっぽい。

【工藤委員】

- 通称で検索すると違うものが上がってきちゃう。

【南委員長】

- つけるかつかないかも難しい。これも10月いっぱいまでですね。

【熊谷復興推進課総括課長】

- 今日の会議を受けて、絞っていただいたものを知事に協議する予定です。

【草野委員】

- 絞れといわれてもできない。つけるは賛成かどうかだけ委員で決めてはどうか。

【熊谷復興推進課総括課長】

- そうですね。

【南委員長】

- メッセージが届くようにつける方向でいくのはいかがでしょうか。アーカイブの無味乾燥なところから、一步踏み出してメッセージを伝えることが今回のアーカイブにはあるので、そういったところを汲んでいただき、事務局と知事と決めていただきたい。
- それでは、本日の議事は以上になります。

5 閉会

【小野寺復興推進課特命課長】

- 大変充実した議論いただき、ありがとうございました。今回いただいた意見を踏まえ、より訴求力のあるシステムの構築を進めていきたいと思えます。名称については、今回提案させていただいた17項目の通称から庁内で検討していきたいと思えます。次回の会議については有識者会議としてではなく、おおむね年明けの時期に皆様に何らかの形で作成中のシステムをご覧いただく機会を考えております。改めてご連絡いたしますので宜しくお願いします。以上をもちまして第2回岩手県震災アーカイブシステム構築に係る有識者会議を閉会します。本日はありがとうございました。